
「力」の作り方

岡崎一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「力」の作り方

【Nコード】

N6363Y

【作者名】

岡崎一

【あらすじ】

超能力が珍しくなくなつた少し先の未来。しかし、「超能力」は皆が想像してたモノではなく、皆が同じの小さな能力だった。そんな、珍しくも何ともないモノに目覚めた主人公「上谷蒼かみや そう」とその周りの人々のお話

エピソード（前書き）

使い古された設定の塊みたいな作品です。結局俺の自己満足なのでそれでも読んでくれると言っ心優しい方、読んで頂ければ幸いです。あと、m a cのテキストで書いているので表示が変かもしれませんが指摘いただけたら随時修正していきます。

エピソード

俺「上谷 蒼」（かみや そう）がそれに気が付いたのはごく最近だ。

ある日、本を読みながら紅茶を飲んでいたら少しの先にあるカップが動いた。

始めは気がつかなかったのだが、良く見たら机の水滴のあとが不自然だったのだ。

不思議に思っていたら、夕食の時に家族気が付いた
どうやら、みそ汁のお椀が動いて手元に来たらしい。

まあ、俗に言う超能力だ。

しかし、最近は珍しくは無い。昔みたいに超能力がもてはやされることも無い。

なんだか、人間の進化だかなんだかで出来るようになったらしい。
詳しくは知らん

だが、毎日そこら中で超能力バトルが起ってるわけではない。
しっかり法律で規制もされてるし、それに一番の理由は大抵の人が
手の先から2〜3cm程度ものを動かせる程度の能力だからだ。

まあ、稀にそれ以外の能力を使う人もいるらしいが。

そんなわけで、家族も大して喜びもせず、コレと言って何も変わらなかつた。

1 - 1 変化

『どんな超能力でも何か鍛えればスゴい力になるんじゃないか。なんて、力に目覚めたほほすべての人間が思うことだろう。』

まあ、自分も例外に漏れることはない。

そのせいで、友人がいなくなった。

「おい、上谷帰り何か食って行かないか？」

「やめとく、帰って鍛えるわ」

「ああ、そうすつか・・・」

呆れ気味にそう返したのは、俺の数少ない友人（唯一の）である森崎だった。

この森崎は、とても良く出来た人間で力に目覚めて意味不明な行動をしてる俺と仲良くしてくれる。さらに、なかなかのイケメン、そしてクラスの人気者ときたもんだ。

チート過ぎる・・・

「上谷じゃあな」

「おう、また明日」

そのチート野郎の誘いを断って自宅に帰った。

早速、いつもの特訓に入る。

やることは簡単、家の庭に置いてある約3kgの砂袋に力を使うだけ。少し前は、もっと色々したのだが今はこれを地道にやっている。

最近気がついたのだが、超能力をたくさん使えば運べる重量が増

えるみたいだ。この3kgの砂袋を動かせるようになったのもつい
一昨日のことだ。

その特訓を四時間程していたら、夕飯に呼ばれた。いつもと変わ
らなかった。

翌日、その日は珍しく森崎とゲーセンに行ってから帰宅した。

「お前、いつもゲーセンは来るよな」森崎が少し、不満そうに言った

「いや、だって飯はいつも奢るっていいだすじゃん」

「いいんじゃない、俺がいろいろ言ってるんだから」

「気を遣うから、嫌なんだよ」

そこで、森崎は少し黙った・・・

「うん、なら今度から割り勘でいこう」

「金ないからパス」

「結局かよ！」

そんな、いつも通りの会話していた時だった。

ダァァン！！

乾いた火薬の音がした。映画やテレビでしか聞いたことのない爆発
の音だった。

「「え？」」

俺たち二人は揃って振り返った

1 - 1 変化（後書き）

なかなか、小説って書くの難しいな・・・
がんばります・・・

1 - 2 混乱

見えたのは、真つ赤な炎だった。

次の瞬間大量の破片コチラに牙を向いた。

俺は、反射的に力を使った。

ピタリと不自然な動きで飛んできた破片が止まった。それから、バラバラと落ちて行く。

「森崎！大丈夫か?!」

「え？ああ、うん」

よく見ると森崎にも、怪我ない。

おかしい、俺は能力があつたからなんとかなつたんだぞ・・・まさか、こいつも？

「おい、森崎おm「いやあ、すいませんな」

胡散臭そつな七三分けの男が近づいてきた。

「いやあ、ほんまにすんません。まだ、民間人がいると思つてなかつたもんで」

「は、はあ・・・」

「怪我はありませんか？大丈夫ですか？うん、大丈夫ですな じゃあ、このことは内密におねがいします、と男が言いかけたときそれは起つた。

ピシッ

「え？」「本日二度目のハモリだ
目の前の男が一瞬で凍り付いたのだ。

それは間違いなく、『超能力』だった。

「君たち！こつちだ！」

と、謎のマッチョマンに腕を引っ張られた。そのまま、ずるずると引っ張られて行く俺たち二人。

「奥に入ってきてくれ！」

そのマッチョマンが、俺たちを置いて今来た方向へ走り出した。

その瞬間、また爆発が起きた。

もう、何が何やらさっぱりだ。

しばらくすると、顔を煤まみれにしたさっきのマッチョ野郎が帰ってきた。すると、突然通信機で何か話し始めた。

「すまない、少し着いてきてくれないか？」

その男は、まだ混乱している俺たちの返答を聞かずに車に乗せた。

かなり荒い運転の黒いワゴン車に揺られこと20分。

今度は、瞬間移動した。

「はい？」

また、わけのわからないことで混乱する俺たち二人。

そこは、とてつもなく広いコンクリートの部屋だった。柱もない本当に何も無い運動場くらいの広さの部屋だった。

そんな馬鹿みたいに広い所で惚けている俺と森崎。

すると、一人の男性が入って来た。さっきの男ではなく茶髪の細身の男だった。

「すいませんね、巻き込んでしまつて。」

「え、は、はい」「う、うん」同時に答える俺たち

「どこか、痛い所はないですか？」

少しの間、顔を見合わせる俺と森崎。そして、森崎が答える。

「いや、大丈夫です。それより、早く僕たちを帰してください」

森崎、お前すげえな・・・

「おや？状況の説明は求めないのですか？」

「いや、知りたいですが、それより家に帰りたいのです」

「そっちの一人の君はどうです？」

いきなり俺に振るか・・・

「そいつの意見と同じですが、後で連絡する手段をください」

「どうして？」

「説明を聞きたいのです」

「そうですか、わかりました。では、少しの間ここでお待ちください」

案外あっさりと連絡方法をくれるみたいだ。

それから一時間程して、解放された。最後に「約束していた、連絡先です。」と言って小さなメモを渡された。

解放されて、帰路に着いてから俺たちは一言も話さなかった。

「じゃあ、ここで」

「うん、またな」

そうして、それぞれの家に帰った。

1 - 2 混乱（後書き）

ほんとに、文字で思い浮かだこと表現するのって難しいですな・・・

1 - 3 説明

その日の夜、俺は今日遭ったこと整理していた。
そして、かなり迷っていた。

あの時目の前の男が確かに『超能力の様なもの』で倒された。それが、とてつもなく俺の興味を引くのだった。

そして、森崎のことも。

確か、あの時力を使ったから俺は無傷で済んだのだ。あいつも無傷なのはおかしい。

やっぱり、アイツも超能力が使えたのか・・・

そんなことを考えていると、いつの間にか眠っていた。

翌朝、いつも通り学校に行った。

当たり前のように、いつも通りの森崎がいた。けど、どちらも話しかけることもなく、その日は終わった。

家に帰り、昨日貰ったメモを手にとって一時間程悩んだ末、電話をかけた。

『はい、もしもし?』

「え?」

このメモは男に貰ったものだ、女性ではない。しかし、あんなでかい施設を持っている組織の人だ秘書的な人かもしれない。しかし、なぜ疑問系なんだ?

そう、結論付けて返答を考えた。

「昨日、このメモを貰った者なのですが・・・」

『ん？ちよつと、待ってね』

「あ、はい」

『リーダー、なんか昨日メモ貰ったって男の子から電話あ。遂に男にも手を出したんですかあ？』

少し嫌なことが聞こえた気がした・・・

しばらくして、昨日の軽そうなあの声が聞こえた。

『いやあ、どうもです。以外と連絡くれるの早かったねえ』

「いえ、そうでもないですよ。で、説明をして欲しいんですが」

『この電話口ではなんだし、今からココにおいでよ！迎えの車もやるしさあ』

「え・・・」

前回のあれのせいであまりいい思い出がないのだが・・・

『まあ、まあ、いいからさ！じゃあ、今そこに迎えの車やるね』

ブツッ

切りやがった・・・俺が返事する前に切りやがった・・・

その十分後、本当にお迎えの車が来た。しかし昨日のワゴンではなく、普通の中型車だった。そして、運転手も普通のサラリーマンっぽい人だった。

さらに驚いたコトがあった。

森崎が先に乗っていたのだ。

「え？なんでいんの？」

「いや、お前こそ」

「昨日貰ったメモに電話したの？」

「しようか迷ってたなら、この車に乗せられた」

「ん？」

てことは、おれが電話したからこいつ連れて来られたのか？
どうやって、俺たちの位置を捉えたんだ？

そのまま車内で会話もなく、十五分程揺られ続けた。
それでまた、瞬間移動した。

三回目でも、結構ビビった。また、帰りも体験するのか……

瞬間移動した先は、昨日の馬鹿みたいに広い部屋じゃなく、長いテーブルのある会議室の様な部屋だった。

当然の如く、そのテーブルの上座には昨日の茶髪男がいた。その横に昨日のマッチョマンもいた。

「突然の招待に応じてくれてありがとう。」

軽そうな中にも、覇気があるしゃべり方だった。昨日やさっきの電話口とは、まったく違うしゃべり方だった。

「自己紹介がまだだったね。ぼくの名前は、木島・A・祐紀だ、Aつて付いてる通り純粋な日本人じゃない。ハーフだ。因みに、この茶髪は地毛だ。

んで、この筋肉ゴリラが……」

「三田村 直樹だ。昨日はすまなかつたな。それとリーダー、今程度のは悪口にもならないぞ」

「そうかい、そうかい。んで、君たちの自己紹介をしてもらえるかな？」

「え？は、はい 上谷蒼です。高校1年です」

少し、声の上擦りかけながらもなんとか言えた。

「森崎仁だ。そいつと同年。んで、なんで俺は拉致されてココに
いんの？」

なかなか刺々しい態度でそう言った。こいつ、すげえな……

「それは、そこに居る君の友達の上谷君が説明を求めたからさ。君も聞きたいだろうと思って、ココに連れて来てあげたのさ」

「んじゃ、さつさとその説明とやらを聞かせて帰してくれ。」

すぐに帰せとは、言わないあたりこいつも気になるようだ。

「了解だ。では、昨日の起ったことの説明の前にぼく達の組織の説明をしなくては、始まらないな。」

ぼく達は能力者支援組織『シャントランジ』だ。ぼくはその組織の下部組織である『Pawns』のリーダーだ。

そして、ここ以外にも能力者の集団はある。昨日君たちが出会ったのは、そんな組織の一つだ。

昨日は、そんな組織間の闘争とそれの仲裁に入ったぼくたちの戦闘だったんだよ。

無関係な君たちを巻き込んでしまつてすまなかつたね。」

説明を一度区切り、俺たちの方を見てニコツと笑つた。

「以上が昨日の説明だよ。なにか質問はあるかい？」
黙る俺たち。

「おや？説明の仕方が悪かつたかな？」

「い、いえ、そ、その、色々と驚きの情報があつたので・・・」

戸惑いながらも答える俺。隣にいる森崎は、しかめた顔でうつむいたままだ。

「あ、安心してね。「秘密を知られたからには、生きて帰さない！」とかないからね。」

うちは、そんなに秘密の組織つてわけでもないし。どんどん、質問してね。」

「じゃあ、その「能力者支援組織」ってなんですか？」

「それはねえ、そのまま意味だよ。最近増えてる超能力者を支援するための組織だよ。社会的に迫害されたりしないように手を回したり、超能力の可能性について研究している。」

手を回すつてのは、昨日みたく町中で喧嘩してる能力者の間を取り持ったりして、普通の人々が差別意識を持たないようにしたりしてるよ。」

「もう説明は、大丈夫かい？」

「はい」

「では、本題に移らせてもらおうよ」

本題？俺たちは昨日の説明の為にココきたんじゃなかったのか？

「きみたち、『Pawns』に入らないかい？」

1 - 3 説明（後書き）

やっぱり、難しいなあ・・・
執筆中のBGMはレッチリでした。

関係ねえ

1 - 4 誘い

「君たち、『Pawns』に入らないかい？」

今言われたコトの意味が理解でなかった。

「なるほど、やっぱり説明だけの為にココに呼んだんじゃないか
のか」

「え？」

驚いて隣の森崎を見る。そんな、俺の目を見ながら森崎が言った

「だって、そうだろ？たかが一般人に対する説明の為にしては、現
在地探つて迎えの車をよこすのはやり過ぎじゃないか」

「確かに・・・」

普通に考えたら分かるよな・・・

「気付かれてたとは！君はなかなかやるねえ」

わざとらしく驚いた木島が言った

「さて、それじゃあ、君たちがウチの組織に入った場合のメリット
を説明してもいいかな？」

「メツリトより、なんで俺を誘うか教えてくれ。あんた等が能力者
関係の組織の人なら、能力者である上谷にだけでいいだろ？」

「そんなの簡単さ。君も能力者だからさ。」

「は？」

かなり驚いた声をだす森崎。昨日から薄々気付いてったから、俺は
やっぱりか・・・って感じなんだけどな

「いや、俺能力なんか使えねえよ？」

「なに言ってるんだよ、昨日の爆発の時使ってたじゃん」

俺が口を挟んだ

「だって、昨日の飛んで来た破片で怪我しなかったじゃないか」

「それは、お前がしたんだろ？」

信じなのか・・・

「オレの能力にそんな力はないよ、昨日のだってあんなに大きな力

が出たのは初めてだ」

「で、でも……」

「自分から見ても森崎君から力出ているように見えたのだが、
ずっと黙っていた三田村さんがそう言った。」

「うーん……」

まだ信じられない様子の森崎

「まあ、そういうことだからさ、『Pawns』に入らない？」

「その、どういった組織か分からないので……」
適当に濁してみるオレ

「さつき言っただじゃん。能力者支援組織だよ」

「いや、だからですね……」

「じゃあ、言い方を変えよう」

「大きな超能力に興味はないかい？」

「え？」

「僕たちの組織はさつき言った通り、能力の研究もしている。そこ
でわかったんだよ、あの小さな能力以外も特別な才能は必要なく使
えるってね」

「う、嘘だろ？」

「何を言ってるんだい、君の目の前に証拠になる人間がいるじゃな
いか」

「え?!」

「自分は肉体強化能力者だ」

「しかも、君はココに入る時体感したはずだよ。瞬間移動をさ」

「あ、ああ……」

「因みにウチに入ってくれるまで方法はお知れないよ」

「え、は、はい」

考えを見抜かれてたようだ。

「そうすぐに回答を求めているわけじゃないんだ、じっくり考えて

くれて構わないよ。未だに自分が能力者だと信じられない君もね。」

「ああ・・・」

「それじゃあ、また連絡してくれよ」

そう言っつて俺たちを帰してくれた。

「おい、大丈夫かよ」

「ああ、大丈夫だ」

能力者だと分かったてなんでこんなに悩んでるのか分からないかっ
た。

「なんでそんなに、悩んでるんだ？」

「いや、何でもないんだ。整理できたらまたその内言っつから、今は
一人にしてくれ」

「ああ、分かった」

そのまま、いつも通りの帰りの分帰路で挨拶も交わさずに帰った。

1 - 4 誘い（後書き）

随分久しくなっていました。すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6363y/>

「力」の作り方

2011年12月9日00時58分発行